共感

やわらかな手で 27

第2章 はたちの軌跡 14

広がる「惣万イズム」

2004年10月、長野県東部の東御市で、高齢者も障害者も利用できる共生型施設をテーマにしたシンポジウムが開かれた。

富山市の富山型デイサービス「このゆびとーまれ」で撮影された写真が次々と大型スクリーンに映し出される。子どもをあやすおばあちゃん、有償ボランティアとして働く障害のある男性…。壇上に立った惣万佳代子さん(53)=年齢は当時=は、マイクを握って言った。

「このおばあちゃんは認知症です。上手に子守してくれるんですよ」

客席の後方で1人の男性が食い入るようにスクリーンを見つめていた。

「これだ」

岩井孝司さん40はつぶやいた。障害者の通所施設を辞め、自分が描いていた小回りの利く柔軟な施設を、惣万さんが既に始めていた。

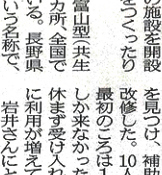
◆◆◆

岩井さんはもともと福祉とは遠った世界にいた。プラスチック成形の工場で働いていたが、バブル崩壊によって会社の経営が悪化。希望退職に応募し、再就職先を求めて行き着いたのが障害者施設だった。

施設では、利用者の思いに応えられない現実に悩む。「困っている人をすぐ助けたい」と思っても、「職員会にかけないと」と言われ、迅速に対応しにくかった。起業への思いが膨らんでいった。

岩井さんのように、富山型デイの理念に共感する人は多い。このゆびが開所した1998年以降、講演やシンポなどの依頼が次々と舞い込んだ。惣万さんは全国を飛び回って自分の考えを広めてきた。

このゆびとーまれを訪れ、惣万さん(右)と話す岩井さん=2012年11月



◆◆◆

岩井さんは2年の準備期間を経て06年1月、東御市で「岩井屋」を開所した。偶然名字と同じ「岩井屋」の屋号で蚕の卵を生産していた2階建ての古民家を見つけ、補助制度を活用して改修した。10人の定員に対し、最初のころは1週間に1、2人しか来なかったが、土、日曜も休まず受け入れ、障害者を中心に利用が増えていった。

岩井さんにとって、惣万さんは先生のような存在だ。岩井屋の開設後、2人は初めて直接会って話をした。岩井さんはそれ以来、ずっと慕っている。12年11月にはスタッフを連れてこのゆびを訪れた。

「長野でも頑張ってもらわんなん」

惣万さんからの激励に気持ちを新たにした。

【21面に読者の声】

話を聞いた福祉関係者や行政マンらは、自らの目で見たいと富山型デイを見学。理念などを学び、地元で同様の施設を開設したり、補助制度をつくったりした。

富山県によると、富山型(共生型)デイは県内で92カ所、全国では千カ所を超えている。長野県では「宅幼老所」という名称で、2002年度から民家改修費などの補助制度が設けられ、岩井さんに追い風が吹いていた。